

山と博物館

第36巻 第1号 1991年1月25日

大町山岳博物館



ジャンダルム

ネコはコタツで丸くなる

今朝は氷点下十四度。

オンボロの愛車はこの冬三度目の始動不能に陥った。こんなときは三十分の道のりを歩いて通勤する。

キョッキョツと畦道の雪を鳴らし、市街の東を流れる農具川沿いに行く。川霧のゆらぎと霧氷に輝く岸辺の草木を前景に、快晴の北アルプスの峰々を仰ぐ。

大町に暮らす私はまた、コタツが大好きだ。動きが鈍り、それだけ頭の調子が良くなる。

大町に暮らす私はまたコタツが大好きだ。ほかの暖房は自分の部屋にはない。

真夜中ともなると室温さえ平気で氷点下になる。寒さ好きの私もさすがに寒い。こんなときはコタツに深々とどぐりこみ、空気の凍る音を聞きながら、本など読んで考えることをし……気がつくとかぜ気味の朝をむかえることになる。

大町に暮らす私はうたた寝も好きなのだ。こんな習性の人間には大町の冬はとてもありがたい。

降ってやだね。隣の松川村はなんにも降ってねえっていうじゃねえかい。ふんとうに少し南行きやちがうもんだね。また帰って雪かかなかいけね。

(雪が降ると大町のひとはよく言う) さぶくてやだね。隣の池田町はあつたけえっていうじゃねえかい。ふんとうに少し南行きや着るもんも石油もちがうでね。(凍みると大町のひとはよく言う)

嫌いだと遠ざかり、好きだとそばにいたいのは、ひとの間柄ばかりではないようだ。

冬は殖ゆだとか。

許されるなら、雪と寒気に抱かれ、春に備えるのも悪くない。

槍ヶ岳のニホンザル (後)

泉山茂之

調査結果からの考察

以上、積雪期を高瀬川最源流で過ごすYN群の追跡結果についてお話ししました。一九八八年には、YN群の下流に隣接して棲息する、TW(燕岳・ワサビ沢)群の個体にもテレメーターを装着して追跡を行いました。TW群は、無雪期には燕岳(二七六三m)に登っていました。このように、北アルプス南部には無雪期に高山域を広く利用する群れがいくつもあります(図八)。槍ヶ岳の周辺にはYN群のほかにも二つの群れが出現します。そのうちの一つは梓川の群れで、もう一つは

中房川の群れと思われる。両群とYN群の利用地域は広範囲にわたって重複しています。本籍地の違う群れが、利用価値の高い高山域を上手に利用しているかのようです。では、高山域はサルたちにとって、なぜ利用価値が高いのでしょうか。

高山域は低温、強風、短い日照時間など環境条件が厳しいため、植物はわずか三ヶ月ほどの間に芽生え、開花、結実という一サイクルを完結させなくてはなりません。サルたちは、萌芽が早く結実が遅いため夏季に食物が不足する高瀬川河床と、夏季に生産力が集

中する高山域とを上手に使い分けられていると言えます。そして、夏季の終りまで残る雪渓、雪田沿いには絶えず草本類の芽生えがあつて、いつも春であるかのようです。さらには、高度差、日当日日陰によって果実の熟りの時期は微妙にずれて、一つのメニューでも長期間にわたって利用することが可能です。たとえば、ベニバナノイチゴの果実は、八月中旬から十月中旬まで食べることが出来ます。北アルプスのサルたちは、分布限界域に生存しているにもかかわらず、その厳しい棲息環境を逆に上手に利用していると言えます。

高瀬渓谷の特殊性

高瀬渓谷には、源流の湯俣から山麓の常盤まで、九つの群れが棲息しています。この地域のニホンザル個体群は、無雪期に高山域を広く安定した利用を行う群れがあること、高度差があつて植物の垂直分布帯がはっきり

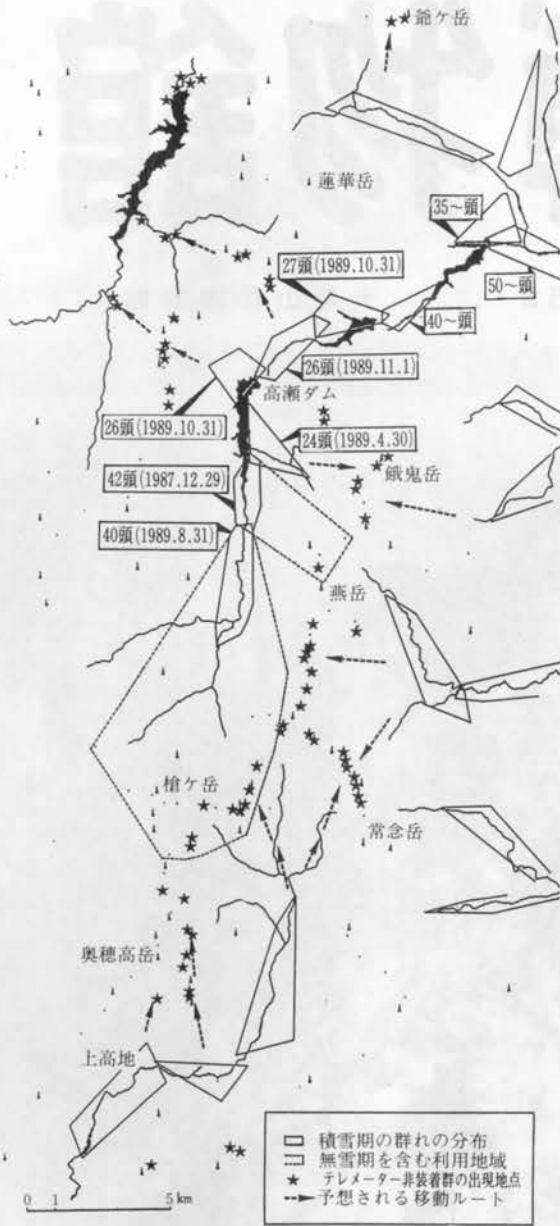


図8 北アルプス南部のニホンザル個体群

している中にぎっしりと群れがあること、山麓には猿害を引き起こしている群れもあるなど、ニホンザルのあらゆる姿が凝縮されていると言えます。

さらに、高瀬渓谷の特殊な点としては、大町ダム、七倉ダム、高瀬ダムと大きなダムが三つも続く、電源開発の影響が挙げられます。



天狗池畔でクロウソゴの果実を食べる YN群のオトナメス個体(1985年9月4日)



槍ヶ岳(3180M)と天狗の池(2600M)



高瀬川 湯俣 (1400M) YN群の積雪期の利用地域 (1985年4月9日)

中流の群れが小型であるのにくらべ、山麓の群れは大型であると言えます。常盤地区に遊動域を広げている群れの個体数は五〇頭以上もいて、北アルプス南部では最大級の群れとなっています。現在、大町市の常盤、平地区では猿害が生じ、銃器による駆除が実施されています。一九八八年までの射殺個体数は一四二頭にのぼります。しかし、このままサルたちを殺し続けても、猿害はなくなるらないでしょう。それは、全国各地の例から見ても明らかです。たとえサルたちを殺していって



ノリウツギの採食痕

YN群がよりどころとする広葉樹林は、ほんとうに河床ぎりぎりの所にしか存在しません。もし、高瀬ダムの上にもう一つダムを作ったら、YN群は絶滅するでしょう。越冬が可能なら、YN群はよりどころとする広葉樹林が残されていたため槍ヶ岳のサルたちは生きてこられたのです。

厳寒、多雪の分布限界域にあたる高瀬渓谷では、河床の広葉樹林がサルたちにとって唯一よりどころとする土地である、ということについてお話ししてきました。ダムができて河床の広葉樹林が水没することは、サルたちにとっては冬の生活の場を失うということを感じます。一九七一年からはじまった高瀬川

での大規模な電源開発も、一九八四年の大町ダム満水開始により一段落つききました。サルたちも、最近になってようやく落ちつきを取り戻してきました。九群のそれぞれの群れの個体数を見ると、かろうじて越冬地の水没を免れた源流の二群は四〇頭前後であるのにくらべ、ダムが連続する中流の群れはいずれも三〇頭以下で、明らかに小さくなっています。下流に向かうに従って、高度は下がり谷は開け、広葉樹林も広がります。当然、サルたちにとっても棲みやすい環境となり、群れも大きくなると思われられます。中流では群れの小型化という形でダムによる河床水没の影響がはつきりと現われています。ダムの影響を免れることができた、最源流のYN群の個体数は四〇頭前後 (一九八七年から三年間) で安定しています。

最後に、調査を進めるにあたって多くの方々から協力と援助を受けました。京都大学霊長類研究所の東滋先生からは調査開始当初から指導、助言をいただきました。ヘリコプターをチャーターしていただいた信越放送株式会社、槍ヶ岳殺生ヒュッテ、ヒュッテ西岳、大天井ヒュッテをはじめとする山小屋の皆様、野生動物保護管理事務所と同僚、長期間の調査に同行してもらった宇都木玄、岩月広太郎の両君、松本営林署治山事業所、東京電力高瀬川総合制御所の皆様にこの場をかりて深く感謝致します。

謝辞
最後に、調査を進めるにあたって多くの方々から協力と援助を受けました。京都大学霊長類研究所の東滋先生からは調査開始当初から指導、助言をいただきました。ヘリコプターをチャーターしていただいた信越放送株式会社、槍ヶ岳殺生ヒュッテ、ヒュッテ西岳、大天井ヒュッテをはじめとする山小屋の皆様、野生動物保護管理事務所と同僚、長期間の調査に同行してもらった宇都木玄、岩月広太郎の両君、松本営林署治山事業所、東京電力高瀬川総合制御所の皆様にこの場をかりて深く感謝致します。

も、高瀬渓谷の奥にはたくさん群れがひしめいているため、次から次へと山を降りてくるでしょう。最後には、槍ヶ岳のサルたちまで山を降りてくるかもしれません。サルを一頭一頭とは見ず、高瀬渓谷全体のサルたちを一つのものとして見なくてはならないのです。

おわりに
日本の動物たちは、山野の改変とともにあるものは滅び、多くのものたちはその姿を変えてきました。しかし、槍ヶ岳に登るサルたちは、太古の時代から変わることのない生活をつづけているのです。北アルプスの大自然という、全く演出のしようがない舞台の中で生きるこれらの崇高さは、私の心をとらえてはなすことはありません。



カワゴケ



上高地 (1500M) 清水沢でカワゴケの茎を食べている (1985年4月2日)

なお、この研究は昭和六一年〜平成元年度 京都大学霊長類研究所共同利用研究費の一部に使用して行いました。

(おわり)
(野生動物保護管理事務所)

チャンタン紀行 (3)

西田 均



歓喜の頂上

ベースキャンプはザンセルカンリ峰の南西約一五kmの河岸段丘に作られた。標高五二〇〇m、わずかに植物が見られる寒々とした場所である。これから約二〇日間ここを基地に未踏峰への挑戦が始まるのだ。

登山装備の仕分け、少しでも快適に暮らすための整地やトイレ作り、ラサの方向に向けてのアンテナ設置など、まだ順応ができていない脱力感にさいなまれながら作業が進められる。

登山活動は偵察から始まった。自動車走行の疲れや高山病の症状を訴える隊員などが生じ、偵察に出掛けられる日本人隊員は2、3

人である。まず東面からの登路が探られた。

その結果「行けそうだ」とのこと。早速翌日からルート工作と荷上げが始まった。

隊を二つに分け順応を兼ねた荷上げ日と休養日をそれぞれ一日取り、未踏峰へのアタック体制は整った。

登路は傾斜の緩い氷河上を困難もなくひたすら歩くのみ。チベット隊員はさすが登山を職業とし三七〇〇mのラサで日頃からトレーニングをしているだけあって、元氣良く歩いて行く。日本側隊員は五〇〇〇mを越す高度に息切れも激しく遅々とした歩みである。因みに隊長からは「チベットに合わせるな! つぶれてしまふ。」との指示が出ている。

五七〇〇mのC1、六〇〇〇mのC2に各自泊し、五月十九日午前八時四十分、昨夜来の悪天にも回復の兆しが見え始めた吹雪の中を頂上を目指し出発する。

BCからC2までの氷河歩きとは一転し、新雪と蓄氷の急斜面を登る。フィクスロープがあるとはいえ、平地の半分以下という空気に十歩も進むと一〇〇mを全力疾走したほどの息遣いとなりながら、十時四十五分、六四六〇mの頂に日本人七名、チベット人六名の計十三名の足跡が初めて印された。日本人には薄い空気との戦いであった。

登頂日の翌日から天候は悪化しBC撤収日まで山頂の姿を見ることができなかった。少ないチャンスを運良く捕らえたともいえる。登山活動が終了したとたん、総隊長はすぐ



ザンセルカンリ峰とベースキャンプ

白い斜面に黒い筋が見え、近づいて見ると一〇〇頭ほどの羊と三人の遊牧民であった。南から牧草を求めてやって来たのだという。彼らは何処から来て何処へ向かうのだろうか。彼らには行かなければならない所は無いように思える。生きるがために歩いているという風情なのだ。

それに比べ私は家族のもとへ、それよりも職場へ帰らなければという気持ちに縛られ続けていることをはつきりと自覚する。

彼らに文明とは掛け離れた大地に生きる民のすさまじきを見たような気がする。

濃霧に閉ざされた平原を地図と磁石を頼りに走行したり、はぐれる車輛が出たりその時は真剣だったが後になれば笑い話のような自動車走行を続け、午後には轍の跡だけの道路に合流することができた。かと言って安全地帯に戻ったわけではない。大地が解けるのが早いか、車が早いか時間との競争がしばらくは続いたのだ。

チベット閑話

★空気の薄い高地で具合の悪くなるのは人間だけではない。車も薄い空気に喘ぐ。因みに日本から持ち込んだ車は二〇〇cc。軽自動車並のパワーがやっつとで、運転手の技量で走破したというのが実感である。

(大町山の会・山岳博物館友の会々員)

表紙写真撮影 古幡和敬

山と博物館第36巻第1号

発行所 長野県大町市 TEL0260-21-1
印刷所 長野県大町市後町 大町山岳博物館
定価 年額 一、三〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野四一三三一九三)